

秋の吟行会 北大植物園



◇令和四年十月十日(月)俳人協会北海道支部の秋の吟行会が、札幌市の「北大植物園」に於て行われた。当日は生憎の雨となり、出足が危ぶまれたが、三十八名もの参加者が正面入口に集結し、今回の三年ぶりの開催を皆心待ちにしていた様子が窺えた。集合写真は諦め、本降りの中臆する事なく吟行開始となった。

◇「北大植物園」は市民の憩いの場として親しまれているが、その歴史は古く明治十年、クラーク博士が「植物学教育のために、植物園が必要である」と提唱した事にはじまる。その後初代園長となる宮部金吾博士の計画・設計により、明治十九年現在地に開園された。博士自ら種を蒔き移植し育てた木々が、百数十年の時を経て今日の広大な森を作り上げた。

◇園内には北海道の自生植物が約四千種類、研究用として栽植されているが、その他にバラ園の横には開拓以前の自然林が鬱蒼と繁り、その中を遊歩道が通っている。正門右側には「北方民族資料室」がありアイヌ民族を中心とする北方民俗の生活・文化に関わる資料が保存され興味深い。

◇森の中を進むと西洋風の歴史的建造物「博物館本館」が見えてくる。ここには今では絶滅したエゾオオカミを始め、「南極物語」で有名な樺太犬タロなど各種の剥製が展示され、特にヒグマの巨大さにはみな圧倒された。「宮部金吾記念館」には博士と親交のあった新渡戸稲造・内村鑑三との書簡や愛用の品々が大切に保管され感銘を受けた。短時間ではあったが偉大な先人の足跡をたどり、晩秋の自然に触れる有意義な吟行であった。

◇句会場は「かでる2・7」の会議室730号室。各自昼食を済ませ十三時までに二句投句。十三時三十分、辰巳事務局長の司会で句会開始。大郷支部長の挨拶と特別選者六名の紹介。参加者は三句選、特別選者は六句選(内特選一句)。事務局長と西村榮一氏による披露が始まると愈々佳境となった。採点集計後、高田句・特別選者特選句の発表と顕彰が行われ、次いで各氏による講評を頂く。

◇互選一位は澤口辰子さん。秋の雨檜に触るればほのめくく

◇十五時三十分、滝谷副支部長の閉会の辞をもって秋の吟行会全日程を無事終了。札幌、小樽、江別、苫小牧、岩見沢、北広島、岩内、当別から十九の結社、同好会の参加者があり、会員外の方も四名参加された。次回もコロナの感染予防に努めますので、多くの方のご参加をお待ち致しております。

(宮ケ丁孝子 記)



俳人協会北海道支部会報

◇発行人 俳人協会北海道支部 大郷石秋
◇発行所 俳人協会北海道支部 事務局
〒005-0841
札幌市南区石山1条2丁目4-18
辰巳 奈優美 方

互選 高 点 句

秋の雨檜に触るればほのぬく

澤口 辰子

倒木の水漬くままに秋深む

田中とも子

走り根のけらのつつきし木屑かな

栗原 郁子

老木に大き洞あり木の実雨

根本 絢子

秋寂びて原始の匂ひ檜大樹

石井こう子

身に入むや熊剥製となりて立つ

奥野津矢子

雨粒に秋色滲むたなごころ

生出 紅南

女王の微笑み偲ぶ秋薔薇

宮ケ丁孝子

秋の雨園八方に樹々の声

三浦 紗和

秋惜しむ一木一草ずぶ濡れに

浅野 数方

秋寂ぶや意匠凝らざるアイヌ漁具

天田牽牛子

古武士の構へ秋霖の檜大樹

滝谷 泰星

選 者 特 選 句

大郷 石秋 選

雨粒に秋色滲むたなごころ

生出 紅南

滝谷 泰星 選

倒木の水漬くままに秋深む

田中とも子

岡澤 草司 選

秋寂ぶや意匠凝らざるアイヌ漁具

天田牽牛子

浅野 数方 選

秋の雨園八方に樹々の声

三浦 紗和

生出 紅南 選

女王の微笑み偲ぶ秋薔薇

宮ケ丁孝子

熊谷佳久子 選

姥百合の種はせてなほ威を正す

宮ケ丁孝子

参加者の一句

草分けてメムに所縁の秋の水

及川 澄

色鳥来雨後の光をまとひとつ

大内 鉄幹

草木に芯を与ふる秋の雨

岡澤 草司

万年の落葉雨紋の池に眠む

梶川 蓉子

少年の日々はむらさき栗拾ふ

河原 小寒

祖父に似し金吾の遺影秋深し

熊谷佳久子

切株のひび割れ椅子や茸生え

熊川 陽子



傘さして雨の音とも木の実落つ

桑原 清恵

えぞ栗鼠の忙しき動き露律

小杉 好恵

深秋の飛雨にぐらつく詩囊かな

小林 道彦

四阿に男三人鳥兜

小松 正幸

書きあぐむ句帳に秋の雨しきり

坂口 悦子

竜淵に潜む気根はひかりを放つ

佐藤 琴美

雨雲乗せつつ落つる木の実かな

佐藤やす美

ピオレ菊ただ明るくて雨の中

園部早智子

訪へる古きにれの樹秋思の木

大郷 石秋

メタセコイアの赤き木肌や秋微雨

高田 喜代

身に入むや金吾の英字ノート旧り

辰巳奈優美

薔薇園へつづく木賊の扉なせり

土門きくゑ

新松子下がりあるもの落つるもの

西田美木子

野紺菊みな太陽のつもりなる

西村 榮一

秋の空海の青得て煌めけり

野辺ひろこ

えぞ栗鼠の走る樹林にオンコの笑

藤田 紀子

サフランの開ちつ咲き満つ雨の中

安田 潤子

街騒を四囲に原始の森の秋

山内 元子

秋寂ぶや衣となりし鳥獣

陽 美保子



会員の四季通季

(五十首題)

透きとほる傘に雨粒ライラック 青木まゆ美 (鴻・花桐)
 日の雫受くる菊師の掌 浅野数方 (白魚火)
 今さらの風樹の嘆や茄子咲きぬ 阿部れい子 (道)
 菜の花やしあはせ色の空までも 池田北陽 (雲の木)
 ダイヤモンド婚過ぎし二人の冷奴 飯川久子 (鴻)
 涓々とアカシア芽立つ瀬のほとり 天田牽牛子 (馬酔木・花鶏)
 野仏の衣あたらし稲架日和 石井こう子 (鶴)
 神の手の触れる願番辛夷咲く 池端素舟 (道)
 偶さかに寺庭散策鳥渡る 井村美智子 (道)
 秋の虹米寿の己が離陸かな 和泉すみ子 (道)
 追悼の黙禱長き敗戦忌 磯江波響 (壺)
 歳時記を重ね晩學子規忌かな 市川節子 (白魚火)
 処置待ちの壁と向き合ひ春灯 伊藤黎 (水脈)
 ポプラより秋は来にけり風わたる 今井嘉子 (百鳥)
 母に出す敬老の日のナポリタン 今泉早知 (白魚火)
 溶接の火花散る散る夏最中 岩城睦子 (道)
 迷ひつつ答を探る振り花 岩崎とし恵 (山茶花)
 農耕馬の姿なき世も稲の花 岩崎久子 (道)
 雨の香の著き朝や土用の芽 岩筋由紀子 (葦牙)
 スケボーの炎天もるとも宙返り 遠藤由紀子 (いには・草木舎)
 露のたう源流いまし呱呱のこゑ 及川澄 (澤)
 沖繩忌過去も未来も風のなか 生出紅南 (道)
 しほり出す声のつぎつぎ寒行僧 大内鉄幹 (万象・たかな)
 海の子となる少年の夏休み 大窪孝子 (道)
 宗谷路の海に向かうて草ロール 大澤淳基 (壺・岳)
 「天に続く道」蝦夷にあり大夏野 大澤久子 (天為)

ピアス痕若き僧侶の夏衣 大坂清子 (いには)
 耳遠き人と別れし秋思かな 大谷博光 (道)
 季の移り密やかに告ぐ水引草 大玉文子 (あふり)
 ほつちやれの腹に霞の飾り塩 大野甲音 (道)
 秋風や吾が住む鄙の千の風 大房ひびき (道)
 湿原の水かがよへる初音かな 大山れんげ (ピリカ)
 日盛や作間の土をねぎらひて 岡澤草司 (アカシャ)
 春隣野鳥図鑑を食卓に 奥野津矢子 (白魚火)
 倒木の根にも日の差し丘雪解 奥山博子 (ピリカ)
 名前まだなくて赤ちやん小鳥来る 笠原敦子 (ピリカ)
 草の実の飛んで初心に戻れる日 梶川蓉子 (方円)
 薄情も情のひとつや春動く 金行康子 (アカシャ)
 名月に生きる証しの影長し 金田一波 (道)
 無雑作に並ぶ蛸壺夏暖簾 狩野和子 (雲の木)
 朝顔の空透きとほる青さかな 川端朋子 (道)
 初雪のけふ来るらしき遠汽笛 川村良子 (ピリカ)
 黒揚羽うしろ姿を見せたがる 河原小寒 (壺)
 宇治橋の下をふた瀬に水は秋 北野克誠 (道)
 初時雨その日は馬に会ひしのみ 久保田哲子 (百鳥)
 踊る手の後の闇の濃かりけり 熊川陽子 (あざみ)
 さつと手を振り秋冷の別れかな 熊谷佳久子 (天為)
 付け返すあの子は居らず草風 栗原郁子 (天為)
 藍浴衣会場ロビーの大時計 桑原清恵 (道)
 夏草の刈られて開く風の道 小杉好恵 (白魚火)
 階段を二段上りに夜学の子 小林布佐子 (道)
 空を切る鎌によろけて枯蟬 小林道彦 (道)
 稲の香や羊蹄山に雲遊ぶ 小松富佐子 (明日葉会)
 がぼがぼと男長靴風の涼 今野律子 (道)

街路樹のオブジェのやうにプラタナス 齊藤 ふじお (華 牙)
 虫の音に会話ひそめて夜の散歩 齊藤 みつ子 (ピリカ)
 開け放つ艇庫を抜くる秋つばめ 坂口 悦子 (白魚火)
 冬仕事 甲 高き声 啼 兎 櫻井 伸良 (いには)
 指ふれて動く鮑を買ひにけり 佐々木 克子 (香 雨)
 師の句碑は蜩のかたち雪を被て 笹原 和子 (ピリカ)
 夏帽子絵本の森へ迷ひ込む 佐藤 琴美 (白魚火)
 酔へば居眠る父よ炉端に冷えゆく茶 佐藤 天津緒 (いには)
 春惜しむ神居古潭の旧駅舎 佐藤 やす美 (白魚火)
 鐵路切れてここよりわつと大花野 佐藤 萌 (天 為)
 白寿までまだある未来苔の花 佐藤 れい子 (アカシヤ)
 小三治のまくら懐かし秋の夜 更科 武四 (雲の木)
 畑のものあれこれ刻み夏料理 澤口 辰子 (ピリカ)
 溪流を飲む雪溪に穴開けて 清水 芳堂 (道)
 晩学の机に赤きばら一輪 菅原 洋子
 父と観る名作映画麦の秋 下山 春陽 (香雨・泉)
 木道を鴨の狼藉ななかまど 園部 早智子 (葦牙・雲の木)
 編棒に百の作り目風花す 高木 則子 (アカシヤ)
 もういいかいまだだよと蝶の舞 高瀬 恵子 (アカシヤ)
 氣象台におてんき広場四葩咲く 高田 喜代 (白魚火)
 白樺に空流れゆく雪後かな 高橋 千草 (壺・藍生)
 肥沃なる大地双葉の畝の数 滝谷 泰星 (郭公・雲の木)
 産土の山河遙かや天の川 竹内 直治 (アカシヤ)
 幾分か瘦せて子別れ鳥鳴く 竹内 美枝子 (アカシヤ)
 初紅葉揺蕩ふ森の水鏡 田島 みつ子 (白魚火)
 星涼し母子は心音重ね合ひ 辰巳 奈優美 (ピリカ)
 山すそは里の近道そばの花 田中 滋子 (壺)
 いそしむてふ言葉ころに去年今年 田中 とも子 (ピリカ)

花冷えや生きた証の古日記 谷川 房子 (河)
 石狩の大河へ急ぐ雪解川 田森 つとむ
 里の灯に絞る弓張月の的 田 湯 岬 (道)
 雪女の影か仏間の窓明かり 大郷 石秋 (秋 麗)
 万愚説嘘の上手な妹も亡く 角田 周子 (ピリカ)
 山に沿ひ水の香に沿ふ吾亦紅 角田 桑里 (壺)
 臥牛山尾に砕け散る冬の波 富田 倫代 (白魚火)
 つられ啼きしつつ雲雀の高揚がり 土門 きく系 (ピリカ)
 プレザーの釦はひとつ更衣 仲田 美智子 (香 雨)
 戦争の終りのやうに黄落す 中村 英史 (方 円)
 寄進する亡父の土地や冬銀河 中村 公春 (白魚火)
 雪を掻く音にまた街動き出す 中森 千尋 (道)
 水温むとは高くなる人の声 並河 裕子 (鴻・花桐)
 手櫛して診察に入る冬うらら 成田 青秋 (天 為)
 あかあかと火床の暗む浜焚火 成田 智世子
 大根をただ千切りに心無に 西川 玲子 (白魚火)
 熊の皮敷きある広間冴返る 西田 美木子 (白魚火)
 夕刊を渡されてある初桜 西野 陽子 (今)
 瓢の笛生きよ生きよとばかり鳴る 西村 榮一 (壺・銀化)
 入山の記名は楷書薄紅葉 仁 和 亮 (知 音)
 初蝶に出会ふ予感や母恋駅 庭田 一美 (道)
 海霧這ふや賢治の詩にありし牧 沼田 泥舟 (いには)
 降りつつも空の明るき春の雪 萩原 肇子 (白魚火)
 麦秋や囀歌の山の紫に 橋本 和男 (天為・アカシヤ)
 走り書き多き父の書秋しぐれ 橋本 末子 (鶴)
 真新な雪の蝦夷富士年明くる 昌 典子 (葦 牙)
 刈りを待つ黄金の海へ野分立つ 服部 若葉 (白魚火)
 バブル期へタイムスリップ更衣 疋田 源 (道)

彼岸荒れまぬかれし空鯨干す 平 京子 (ピリカ)
 そば枕凹ます眠り秋ふかし 平 川 靖子 (秋麗・群青・河)
 子を抱いて寝し日は遠く馬鈴薯の花 平 松 富二代 (壺)
 母の日の花束しばし解かずおく 広 瀬 むつき (白魚火)
 日は山へ蝦夷春蟬のしぐれなほ 藤 田 洋子 (鶴)
 二度三度風を乗りかへとんぼ来る 真 壁 静江 (道)
 曲り江の明けの明星昆布漁へ 松 川 悠乃 (雲の木)
 旧正の朝の杏仁豆腐かな 松 田 ナツ (泉)
 古里へ飛機はひたすら冬山河 松 本 美知子 (道)
 地を岩をつかむ走り根山開き 三 浦 香都子 (対岸)
 有珠山を背負ふ街並花かんば 三 浦 紗和 (白魚火)
 競ふこと覚えてとねつ仔夏木立 三 國 矢恵子 (道)
 和晒に染める屋号や梅ひらく 宮 ケ 丁 孝子 (からたち)
 梅干して働きの母なりし 森 淳子 (白魚火)
 朝潮の紺青ふきのたう硬き 森 田 佳代子 (百鳥)
 雪囲ひ解く納骨の済みてより 八 重 樫 洋子 (ピリカ)
 留守の子に買ふ桜餅二つづつ 山 内 元子 (雲の木・郭公)
 健やかな家族の寝息星月夜 山 内 敬子 (アカシヤ)
 青田風ラジヘリ飛ばす三代目 山 下 好晴 (道)
 それぞれに二人の時間冬銀河 山 田 ゆきこ (鴻)
 肝心な事は言はずに鳳仙花 山 羽 法子 (白魚火)
 水口に祖父の声する青田かな 山 本 玲子 (道)
 降る雪に波の飛びつく噴火湾 陽 美保子 (泉)
 言の葉を掘るや一日の雪の嵩 吉 岡 睦子 (馬酔木・道)
 老人に弾みつけたるリラの道 米 山 幸喜 (朱夏)
 露草の道は近道夜勤明け 蘭 さと子 (鴻)
 大海へ濁り一筋雪解川 渡 部 彩風 (道)

以上 一三七名

新会員紹介

- 俳号(所属結社誌)
 ① 簡単な俳句歴
 ② 自選の一句

池野やまべ(道・草の花) 札幌

① 平成二十八年「道」入会

令和二年「草の花」入会

② 絵巻より幽かな香り夕紅葉

大坂 清子(いには) 苫小牧

① 平成二十七年「いには」入会

令和四年「いには」同人

令和四年「結ひの会」入会

② 未だ見ぬ満州の地よ冬満月

小松富佐子(いには) 苫小牧

① 平成二十九年「明日葉」入会

平成二十九年「いには」入会

令和二年「結ひの会」入会

② こだはりも角も失せたり花は葉に

坂口 悦子(白魚火) 苫小牧

① 平成三十年「白魚火」入会

令和三年「白魚火」同人

② 不器用な素数の孤独虎落笛

さとつみ(葦牙) 余市

① 昭和六十一年「葦牙」入会

② 青林橋がふりと進路決めにけり

佐藤やす美(白魚火) 札幌

① 平成二十九年「白魚火」入会

令和二年「白魚火」同人

② 母となる子の横顔や風光る

下山 春陽(香雨・泉) 札幌

① 平成三十一年「香雨」入会

令和四年「泉」入会

② 三分でをはる診察フリージア

菅原 孝子(アカシヤ) 寿都

① 平成十七年「ぶなの里俳句会」入会

平成十九年「アカシヤ」入会

② 若葉風両手つばさに一輪車

橋 千祥(アカシヤ) 富良野

平成二十三年「アカシヤ」入会

平成二十八年「百花集」同人

② 大根の穴累累と暮るるなり

真壁 静江(道) 北見

① 平成二十九年「道」入会

令和四年「道」同人

② 一度きりふらふら漕いで使ひの子

山内 敬子(アカシヤ) 上富良野

① 平成十九年「このみ俳句会」入会

平成二十年「アカシヤ」入会

平成二十七年「アカシヤ」同人

② ガラス器の金平糖や春の虹

風 韻 帳

おめでとうございます

★第29回俳人協会俳句大賞に
次の方が入選されました。

・古賀 雪江選 小林さつき氏

第25回 北海道俳人協会賞

令和3年度および令和4年度の選考対象句集は以下の通りです。なお、選考委員1名が支部退会のため、欠員となっています。

令和4年度刊行句集

句集名	著 者	結社名	刊 行
1 水面鏡	村 岸 明 子	貂	R3.10.27
2 羽のかろさ	名 取 光 恵	アカシヤ い に は	R4.12.31
3 菊の酒	中 村 公 春	白 魚 火	R5.1.20

第二十五回 北海道俳人協会賞 選考委員

磯江 波響 (壺)

〇九三〇〇三五 網走市駒場南二丁目

七十五

大澤 久子 (天 為)

〇六〇〇〇〇三 札幌市中央区北三条
西十八丁目二北三条ビル三〇三

滝谷 泰星 (雲の木)

〇四一〇八六七 札幌市清田区北野
七条一丁目十一六

竹内 直治 (アカシヤ)

〇五三〇〇〇四二 苫小牧市三光町
五丁目二十一 一五十七

※任期は二年 (選考繰越の場合を除く) 通常、毎年半数を交代

選考条件

① 俳人協会北海道支部会員の句集であること。

② 令和三年四月一日から令和五年三月三十一日までに刊行されたものであること。

③ 対象者は、選考委員各氏と事務局あて各一冊を送付して下さい。

★ 合同句集、遺句集及び既受賞句集は対象外となります。

北海道俳人協会賞選考内規

一、賞の性格

この賞は俳人協会北海道支部の会員が発行した句集を対象とし、最優秀と認められる句集の著者を顕彰するものとする。

二、選考の対象

四月から翌年の三月の年度内に刊行した句集で、遺句集、合同句集及び既受賞者は対象としない。

三、選考委員

選考委員は五名とし、支部長が選出し委嘱する。選考委員の任期は二年とし、毎年半数交代とする。

四、選考の方法

第一次審査は書面による推薦とし、第二次審査は選考委員の合議による選考とする。顕彰に値する句集がないと認められるときは、該当者なしと決定する。

五、結果の発表

選考の結果は、最近に発行する会報に掲載するとともに、受賞者本人に通知する。

六、顕彰の方法

顕彰は、支部の定時総会に於いて行い、正賞として表彰状、副賞として賞金五万円を、それぞれ贈呈する。

事務局の一年

事務局長 辰巳奈優美

事務局次長 陽美保子・中森千尋

事業部 中森千尋・小林道彦・奥野津矢子

編集部 陽美保子・宮ケ丁孝子

会 計 西田美木子

コロナウイルス感染拡大の影響を受け令和四年度も中止になった行事がありました。左記のほか、総会資料、俳句大会、会報等の編集作業をかかえる2・7及びリモートにて実施。

・四月十五日

事務局会議

(於・ホテル札幌ガーデンパレス)

・四月二十二日

令和三年度決算会計監査 書面承認

・五月十五日

第三十八回総会中止書面表決

・五月三十日

第十四回俳句大会入賞者への賞品発送

(於・かでの2・7活動センター)

・七月二十九日

理事会

(於・かでの2・7会議室)

・八月五日

事務局会議

(於・かでの2・7活動センター)

・九月二日

会報98号発行・発送

・十月六日

秋の吟行会打合せ

(於・かでの2・7活動センター)

受贈句集紹介

◇『桜の世』(文學の森)

清水 道子

『花曜』に次ぐ氏の第三句集。

平成十九年から令和二年までの三百句を取める。句集名は「階をのぼりておりて桜の世」より命名。昭和五十三年斎藤玄に師事。「壺」入会、同人として句歴を重ね第一句集『噴水』は北海道俳句協会鮫島賞受賞、第二句集『花曜』は北海道新聞俳句賞を受賞した。平成十年「丹」を創刊、代表を務める。この時代の後半の句を顧みつつ、残生を俳句の目で見つめてゆきたいとの思いの一書。桜への「あくがれ心」が静かに流れ、繊細な美意識が独自の世界をつくる。

・たましひの空に混みあふ桜かな
・夜桜のあをあと水あげてをり
・腹中のけぶりを吐ける花の鯉

(R4・7・28刊)

◇『羽のかるさ』(ふらんす堂)

名取 光恵(いには)

本句集は『水の旅』に次ぐ氏の第二句集である。全六章からなる五〇一句は、時に病に臥しながらも天命をありのままに受

け入れ、俳句と共に生きる喜びを自分の言葉に乗せておおらかに謳う。北の大地を思わせる漂とした作風は、作者の真摯な生き方そのものである。題名ともなった「遠汽笛羽のかるさの春帽子」は、「いには」主宰村上喜代子氏が「俳句を生きる力や癒しとして心を解き放し、句の旅に出かけましょう。春帽子に軽やかな羽の飾りを付けて」と祝福の序文を添えられている。

・稲の道嬢歌の山へつづきけり
・樹の齢警の齢や滴れり
・水温む水の流るるやうに生き
・薯の花北の地が好き人が好き
・かたつむり希望は前にのみありて

(R4・12・31刊)

宮ケ丁孝子 記

合同句集

◇時雨・葦牙創刊百周年記念

北方季題句集『朔北の詩』

葦牙叢書第一〇一集

(柏嶋舎)

「葦牙」百周年(「時雨」通巻)を記念しての刊行。最近十年分の会員作品が季語別にまとめられている。北方季語として「多喜二忌」「丹頂鶴」「北辛夷」「巨

狼忌」「サンピラー」「しまふくろう」「鮭風」「雪解」「寒立馬」「リラ冷え」などを詠み込んだ多くの作品が収録され、気軽に親しめる一集である。

石川 節子

・多喜二忌や句読点無き母の文

鳴海 宣紘

・鶴の舞太古の風を起こしけり

三崎千恵子

・巨狼忌や師に会ひに行く校正日

成瀬 明

・心眼で見えてゐる昼の縞ふくろふ

畠 典子

・道産子の開拓魂寒立馬

(R4・12・31刊)

辰巳奈優美 記

会員の皆様へ

会員の皆様におかれまして、入退会また、その他のお問合せの際は、支部事務局 辰巳奈優美
☎011(591)4609までご連絡下さいますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

— お願ひ —

会報「北こぶし」は通常メール便にてお届けしておりますので、住所変更の際は、郵便局への届出と別に、支部事務局へのご連絡をお忘れなくお願い致します。

・十月十日

秋の吟行会 参加者三十八名

北大植物園・句会場かでの2・7会議室

・十一月二十四日

事務局会議

(於・かでの2・7活動センター)

・十一月二十九日

理事会中止 書面連絡

・一月十六日

事務局会議(俳句大会作品初校)

(於・かでの2・7活動センター)

・一月二十六日

事務局会議(俳句大会作品二校)

(於・かでの2・7活動センター)

・三月二日

事務局編集会議

(於・かでの2・7活動センター)

・三月三十一日

会報99号発行・発送

(於・かでの2・7活動センター)

支部40周年記念誌作成

— 基金ご協力のお願ひ —

前号にてお知らせしました

とおり、40周年記念誌作成に

あたり基金を募ります。

同封の払込用紙で会費と共に

一口千円にて募集しますの

で、ご協力のほどよろしくお

願ひ致します。

受贈俳誌より

「葦牙」二月号

この村に生れ住み八十路鶴と在り
松井紀代子
掻き寄せて潮の匂ひの落葉かな
市川 勉
秋しぐれ一灯づつを濃くしたり
岡田富美子
朝焼けの峡の風読み鳥渡る
高橋 伸夫
牡蠣豊漁ガンガン焼の声荒し
かさいともこ

「アカシヤ」三月号

五百巻越えし写経や初硯
橘 千祥
枯れてゆくものに日差しのやはらかに
佐藤れい子
ポケットの未完の一句年惜しむ
中神 洋子
天狼や兄の遺せし句報読む
石川 周子
大雪や子規に告げたき雪の嵩
阿部 敏男

「雲の木」三月号

校庭に道ひと筋や雪二尺
山内 元子

至福とはかくの如しと雪見風呂

池田 北陽

寒月や海賊船の幻影を

松川 悠乃

沈黙を破るがごとく春吹雪

伊藤 淳雨

裸木にもつばら注ぐ陽の光り

佐々木 薫

「雪嶺」一・二・三月号

完走のフルマラソンや夏の果
上田すみ子
コップ手に枝豆つまみ夕月夜
近藤ゆたか
小さき脳にコンパス持つや渡り鳥
佐竹 正治

デパートの今昔包む本の秋

宮下美紗子

行く秋の名もなき民よ逃げ惑ふ

伊東美弥子

「壺」二月号

開戦日赤紙配る駅の前
磯江 波響
干大根好々爺にも似たる哉
河原 小寒
C Dに巡る百国夜の長し
石渡 穂子

鴉にも好きな冬木のあるらしく
金川 允子

出番なき世を憂ひけり雪女

小林 大雪

「道」三月号

埋火を掻き熾すこと手記を書く
齋藤 勝次
銀杏舞ふ濁世明るく明ると
松本美知子
海鳴りに日曆寒き漁夫溜り
小野 恣流
小さき箸一膳増やし年用意
堀井 礼子
湯たんぽのブリキの敵の昭和かな
角谷 周治

「ピリカ」二月号

利尻富士横切るならひ雁渡る
山城 カヨ
凍滝へつぶてとなりて波の華
土門きくゑ
観梅の大きボスター無人駅
尾崎 均
旧き良きフォーク演奏銀杏散る
久保 年生
元旦や八十路の吾に夢多く
坂井マチ子



謹 悼

■宮本まつ子(天為・葦牙)

R4・8・12(94歳)

遠霧笛文字なき民の蜂起の地
卓袱台のはらから遠し雑煮椀
(「北こぶし」95号・93号より)

■若山直美(壺)

R4・9・9(87歳)

早春や色を豊かに鳥図鑑
初蝶の水に見入れば水にくる
(「若山直美句集」より)

■齋藤静弘(道)

R4・10・7(83歳)

除夜の鐘火種のごとき妻ありぬ
雛の日の優しさもてよ嫁ぐ日は
(「第一句集『絵葉書』」より)

■柴田襄子(アカシヤ)

R4・10・23(80歳)

瞬の真つ只中を退職す
師の声の遠ざかりゆく夕焼空
(「アカシア並木」より)

■豊岡はじめ(雲の木)

R5・2・5(87歳)

天井の宴続きぬ雪止まず
米寿まで生きてをります寒の入り
(「雲の木」第86号より)

支部会報

「北こぶし」百号に向けてご協力のお願い

★「北こぶし」は次号(九月三十日発行予定)で百号となります。記念号として会員の皆様の代表句または好きな一句と自句自解(60字以内)の掲載を企画しています。同封の葉書に記入の上、五月末日までにご返信ください。
ご協力のほどよろしくお願い致します。

令和5年 第39回定時総会のご案内

- ◇ 日 時 令和5年5月21日(日)
13:00より(12:00より受付開始)
- ◇ 会 場 ホテル札幌ガーデンパレス
札幌市中央区北1条西6丁目
TEL 011-261-5311
- ◇ 内 容
- ①定時総会(13:00～)
 - 議 案
 - ・ 令和四年度事業報告並びに収支決算報告
 - ・ 令和四年度会計監査報告
 - ・ 令和五年度事業計画(案)並びに収支予算(案)
 - ・ その他の報告・討議
 - * 記念講演はありません
 - ②北海道俳人協会賞について
 - ③第十五回俳句大会顕彰
 - ④懇親会(15:30～17:30)
 - ・ 申 込 事前申込
 - ・ 会 費 六千円(当日受付にて申し受けます)
 - * 同封のハガキにて出欠をお知らせください。



秋の吟行会スナップ



俳人協会北海道支部第十五回俳句大会速報

- 一位(14) 星流るひとり一人の兵に母 苦小牧 名取 光恵
 二位(13) 真つ先に改札出づる捕虫網 北見 金田野歩女
 二位(13) メモほどの母の手紙や一葉忌 岡崎 水野 幸子
 三位(12) 産着干す五月の空の真ん中に 北見 花木 研二
 四位(11) ルビナスや坑口かたく塞がれて 札幌 河原 小寒
 五位(10) 海峡の風の尾掴み鳥渡る 福島 葉山 彰
 六位(9) 直角にワクチン打たれ春を待つ 札幌 飯川 久子
 六位(9) 入れ物と言はれ差しだす夏帽子 石狩 赤繁 忠弘
 六位(9) 牛舎からともる村の灯暮早し 旭川 笠原 敦子
 七位(8) 捨案山子は抱くやうに抜きにけり 大樹 伊藤 やす
 七位(8) 除夜の鐘余韻の中に別の鐘 大阪 関 一步
 七位(8) 身に沁むや骨董市に鉄兜 札幌 高田 喜代
 七位(8) 生きてゐる証と今朝も雪を掻く 札幌 田森つとむ
 七位(8) 襟巻の狐が棲んでゐる筆筒 旭川 小林布佐子
 八位(7) 投函の前の再読小鳥来る 岡崎 近藤百合子
 八位(7) 風わたる野に白波やそばの花 福島 大津 大雄
 八位(7) 海光をそのまま卓へ初秋刀魚 札幌 村松 良子
 八位(7) 廃線と決まりてどつと草の絮 札幌 中村 英史
 八位(7) 立冬や篩うてかをる香炉灰 札幌 幌 高橋 千草

※カッコ内は得点です。

※作品は同点の場合、特選句を優先とし投句の到着順としました。

事務局&編集室



◆一軒家に住むと、雪掻きは必須の作業となる。連日の雪が続いた一月から二月。長年の修行の成果(?)か、最近では二時間近い雪掻きの後も、筋肉痛にならずに済んでいる。テレビでは、雪掻きのインストラクターなる人物が紹介されており、その疲れない為の動作というのを見ると、私が普段意識している身体の動きに加えて、雪掻き棒の持ち方も同じであった。年の功で習得した、自慢にもならない話だが、老後もこのやり方で雪と上手に付き合せてゆかねば、と思うこの頃である。

(辰巳奈優美)

◆昨年十二月四日から三泊四日で南紀白浜にツアーに行つて来た。永年行きたいと思つていた所で、漸く念願が叶った。

初日は宿泊の白浜に着いただけ。二日目はフリーで、アドベンチャーワールドへ。お目当ては勿論パンダ。今年二月末に中国に返されるお父さん永明と、双子の桃浜・桜浜も見ることが出来た。返還のことは全く知らなかったものでラッキーだった。永明はどつしりと座り悠々と竹を食べていた。「お父さんパンダ永明様」と知事からの表彰状が飾られていて、和歌山を全国に発信した功績を称えていた。

た。

那智の滝の雄大さと本州最南端の潮岬、荒々しくも美しく自然豊かな海岸線。山深く蜜柑と南高梅の産地の暖かな土地柄を楽しんで来た。
(西田美木子)

編集後記

▽第十五回俳句大会には多数のご応募をいただき、誠にありがとうございます。本号に俳句大会作品集を同封していますのでご覧ください。

▽今年は五月から新型コロナウイルスが五類感染症に移行されることを踏まえ、三年ぶりに対面の定時総会および懇親会を行うことに致しました。多くの皆様のご参加をお待ちしています。また、「北こぶし」は次号で百号となります。これを記念して、会員の皆様の代表句および自句自解を掲載することとしました。皆様のご協力をお願い致します。つきましては、総会出欠葉書(締切五月十五日)、代表句および自句自解記入葉書(締切五月末日)を同封します。期日までにお忘れなくご返信ください。また、会費振替用紙も封入していますので、どうぞよろしくお願い致します。

▽コロナ禍も四年目となり、ウィズ・コロナが徐々に定着しつつあります。お互いに用心しつつ俳句を楽しみましょう。

(陽)